

(1) 中村中学校

学 校 長 浜口 和彦
校内研究代表者 浦田 国宏

1. 研究主題 「学びを工夫しながら、課題解決できる生徒の育成 ー学びのつながり・他者とのつながりから深い学びへー」

2. 主題設定の理由

今年度は、県の指定事業『「令和の授業を創る」推進プロジェクト令和の授業 DX』における拠点校、『不登校支援推進プロジェクト事業』の3年目、『中学校全学年35人学級編成に係る研究指定』の5年目、『中学校組織力向上のための実践研究事業』の10年目の研究指定を受け研究を進めるとともに、対話型AIを活用した学習支援実証研究校として、AIの活用などを通じた学びなどについても研究を進めてきた。また、本校ではこれまでもこれまで国や県の研究指定を受け、授業改善に継続的に取り組んできた。

例年、全国学力・学習状況調査の結果分析をもとに、本校の授業づくりを通じて付けるべき生徒の資質・能力について協議を重ね、9月に研究主題を更新するとともに、授業づくりの柱を設定している。今年度は、結果分析に留まらず、問題分析を通じて、今求められている力について全体共有を行う中で、「課題の全体像を掴むこと」や、「(掴んだ全体像をもとに) 解決までの見通しを立てること」、「(見通しをもとにして) これまで身に付けてきた知識や技能を関連付けながら課題解決に自らの力で取り組んでいくこと」ができるようにすることが必要であるということを確認した。また、結果分析からも、生徒の知識・技能が個々で集積されているものとなっており、それらを新たな課題において、自らの判断のもとに活用することができていないことや、課題を把握し、資料を見る前に自分で考えを持つことなどに課題があることが確認された。

そこで、主体的・対話的で深い学びを実現し、こうした資質・能力の育成に向けて、課題設定の工夫から生徒に問いや解決までの全体像を掴ませ、見通しを持たせること、生徒が持った問いや課題に対して、これまでの学びを活用させ、自分なりの考えを持たせること、クラウドを活用した協働的な学びや、ペア学習・グループ学習などでの協働的な学び、AIとの対話などを通じて、自分の考えをさらに広げたり深めたりできるようにすることができる授業づくりが必要であると考えた。

生徒一人ひとりが、課題に応じて、これまでの学びを活用して自ら考えを持ったり、他者との協働的に学ぶ中でその考えを広げ、深めることを通じて、未知の課題に対しても自分の力で解決に向かっていけるようにしたいという思いから、上記の研究主題を設定した。

3. 研究の進め方と方法

生徒が主役の授業づくりを目指すという共通認識のもと、学力向上部会、仲間づくり部会の2つの研究部会と、各教科会及び教科連携を図る教科主任会で研究を進めてきた。研究主題を達成するために、以下に示すことに取り組み、検証・改善を行ってきた。

(1) 学力調査等の分析を活かす取組

全国学力・学習状況調査等、各調査の自校採点、業者採点の分析と課題の共有及び問題分析から求められる資質・能力の確認、取組の検証等のサイクル化

(2) 授業改善の工夫

①研究主任—教科主任会—各教科会の連携による授業改善

・全体で確認した課題などから、授業改善の方向性について研究主任から提案

- ・月2回の教科主任会で共有・協議・実践の交流
 - ・教科主任から各教科会への共有、具体的実践についての協議・確認等
 - ・教科会で板書、成果物、テストなどから検証及び授業改善
 - ・授業参観チャットに「生徒の学びを工夫する姿」の共有、目指す生徒の姿の具体化
- ②研究授業の実施(校内3回：国、社、音、授業DX公開：理、英、授業を見る眼を鍛える講座：英、社)
- ・参観の視点がずれないような工夫…教科長による授業前の説明、授業メモの活用
 - ・授業アンケートの実施…課題の焦点化 → 提案
- ④普段の授業の振り返り

4. 今年度の成果と課題

【成果】

- ・例年、全国学力・学習状況調査の業者採点結果を受けて、そこから見られる強みや課題などについて全体で協議して、その協議内容をもとに、研究主任及び管理職で協議して、研究主題や授業の柱を決定、全体へ周知するという流れとなっていたが、今年度は、「問題にどのような変容が見られるのか」「そのような問題に対応するためにどのような力が必要なのか」という視点で問題分析を行った上で、現状とのギャップを確認し、本校の授業づくりを通じて育てたい生徒の姿を全体で共有した。また、その内容を研究主任が整理してまとめた上で、教科主任会などで協議を重ねて、研究主題と授業の柱の決定に至った。こうした流れで協議を重ねる中で、授業づくりを通じて目指す生徒の姿や、そのための授業づくりのポイントについて、例年以上に全体で共通認識を持ち、授業改善に励むことができている。
- ・日ごろの授業における生徒の姿から、授業を振り返り、『学びを工夫する』生徒の姿について、検証および実践を繰り返していけるように、授業参観チャットを開設し、チャットを通じて、生徒の姿から、管理職から授業のフィードバックを得られるようになった。
- ・授業についての協議では、動画によるストップモーションでの協議を2回行った。生徒の姿で協議したい場面で動画を止め、そのシーンについて協議をすることで、より生徒の姿から授業を考えることにつながっている。
- ・中村小学校との合同校内研修会では、「コミュニケーション能力の育成」をテーマとして教科会を行い、第1回で「コミュニケーション能力を身に付けた児童・生徒の姿」について第2回で「その姿にするための具体的な実践について」、第3回で「実践の振り返り」を行い、年間を通じて共通認識のもとで、コミュニケーションの育成につなげるための授業づくりを実践できた。

【課題】

- ・学力調査の結果等から、以前として知識・技能が個別の集積に留まっており、授業で扱っていない場面で、自らの判断で活用する力に課題があることが確認された。授業づくりの中で、解決のために、どのような知識・技能を活用できそうか、見通しを持たせて課題解決に臨ませたり、どのような知識・技能が役に立ったか振り返らせ、言語化させていくことが必要である。
- ・授業DXに関連するアンケートで、協働的な学びが自らの深い学びにつながっているかを問う項目の、生徒の肯定的な回答は全国値よりも大きく上の数値となっていたが、実際の授業の中で生徒が協力しながら活動する場面を振り返ったときに、自分の力で課題に取り組むことができおらず、それに起因して、知識・技能の活用や自ら課題を捉え判断する力に課題が見られている。協働的に学ぶことの目的を生徒と共有することや、協働的に学ぶ前に自分で考えを持つことを価値づけていくことが必要である。
- ・デジタル学習基盤の活用にまだ課題があり、AI活用や検索などを通じて安易に課題を解決できたと判断してしまう生徒も多く、こうした環境における教員が設定する課題の工夫が必要である。